會報
第4号
昭和34.7.5
兵庫県宍粟郡山崎町
教育委員会内
宍粟郷土研究会
電二三番

揖保川・高瀬舟聞書

宇野正茂

(一)

高瀬舟については、千石家平瀬家文書、今宿の旧家等に記録のあるが、現存の古老より得た点を報告する。まだ〳〵諸種の点で興味深い事実を御存知の方も多いと思うので、御教示願えれば幸甚である。

(二)

高瀬舟は山崎町出石河岸より出たものが、最北で、こゝより下流では揖崎、竜野など、積荷さえあればどこの河岸からでも下つて居たが、出石に集るものが最も多く五〇〜六〇艘(大正初期)位はあり、揖崎でも東西併せて五、六艘が常時、揖崎石其他の運搬に当つていた。新宮以北の村々の持舟だけでも一五〇艘位もあつたとも思われる。

これらの舟の舟頭は、揖保川沿いの村々の農民が農閑期の副業として従事し、川戸村では奥所、北山を除いて殆んど舟頭で、宇原も全部位、上笹、下笹、慶子にもあり、平見、香山、家氏、出屋敷、下野にも多くあり、平見、香山、家氏はそれ〴〵、七、一〇、二、の舟を持ち、出石にも七〜八艘の舟を持ち、舟頭があつた。又、下野、吉島には造船所もあつた。舟頭の高瀬舟の所有関係は次の様な場があつた。即ち

(1) 舟頭(三人)による共同出資の自前のもの

(2) 問屋で舟を借りる(一回五十匁程度の舟床(賃賃)を返す)

(3) 問屋持ちの舟に乗る(日当を受ける)

(1)の場合 二〜三年目位の舟ならば、二〇〜三〇円、新造船ならば 四〇〜五〇円 位で買えた。

右の舟は 長さ七間、巾六〜六、五尺位あつて、荷を積む部分は前后の部分を除く(舟頭の場所)と、五五間位あつて、舟頭は一艘に三人づつ乗り組み、前方部に乗る漕ぎ手が二人で「表乗り」と呼び、その中一人は水路を見なれた熟練者でなければならぬが、他の一人は補助役で初心者がこれに当てられ、後方部には「カジ」取りが一人乗り「とも乗り」と呼び、舟長格の者が勤めた。

積荷は、木炭、割木、丸木、ツツジ芝、などが多く、出石から積む木炭は「大沢」産のものが良質とされ、炭焼上手の人の手になつた金、倉、㊙の銘柄は特に上質とされた。積荷の能力は、上水(豊水)ならば、木炭三〇〇俵、干水(渇水)ならば一五〇〜一六〇俵で、この場合一俵に付、二匁五厘程度の

運賃を得た。又喘崎からは、喘崎石の外、佐用方面から陸運された茶もあつた。

出石〜網干間所要時間は、上水で二時間、干水で三、五時間位要した。

喘崎では石を積んで、夏期でも出水の時は井堰を越して舟が下つたが、それ以外は夏期は灌漑用の井堰があるので舟は通らず、秋の井堰切りの後、翌年の四月頃まで通つた。

網干より、溯航する時は細引（ほそびき）三〇〜四〇尺あるもので、舟を土堰より二人が引張つて、一人は舟上で棒で突張つて「カジ」をとつて上つてゆく。

出石に集る舟頭仲間には、次の様な仕来りがあつて、秩序が保たれていた。即ち舟頭の積荷の争奪を防ぐため、先づ

舟頭が舟を引いて昼頃、出石に到着すると「札所」に出頭して到着の由を申し出る。（札所の世話は問屋の安原家がしていた）一応舟頭の到着の終つた頃を見はからつて、籤を引いて積荷の順番を決定する。これが発表されると順次得意の問屋を廻つて積荷をはじめる。時には籤番の早い舟でも充分に積荷が整わない時には、その日は出発を中止して荷集めに協力するが、若し集らぬ時には、積荷を舟に置いたまゝ皆帰宅し、翌日又荷の集るのを待つて出発する。

順調に積荷があつた時

第一日　昼頃出石集合、籤引、積荷を終り舟で自分（舟頭）の村まで帰り、河岸に舟を止めて、自宅に帰り一泊

第二日　早朝より網干に下り、積荷を問屋に渡し、其の日のうちに帰路につく。途中日没となり、宿泊（竜野泊り等）

第三日　早朝より前日につゞいて帰宅、休養

第四日　第一日の通り昼頃出石札所へ。

要するに一回の川下りには前后、三日を要することとなる。

網干の問屋は二五〜三〇軒もあつた様で、主なるもの次の通り。（○印は大きいもの）

網干余子浜　○土佐屋　土田政吉
〃　〃　銭木　某
〃　〃　大村　某
〃　浜田　津田弓治
〃　新在家　あこじ
〃　〃　○　林　某
〃　〃　○富士
〃　大江島　○　富田勘治
〃　○山口屋　和田梅治

梅田外治

綱干吉備

カニエ屋

〃　平松

〇?〇?勘右

高瀬舟の通路は常に「川堀り」を行つたが、費用は舟頭仲間が舟賃の中より（五十戔位）積立て、浅い所が出来るとその積立金の中より舟頭に渡して受持の区域を堀らせた。一時は県庁より金が出ていたのが中途で止んでいたのを出石の高所屋の「おこの」さんの養子が運動して呉れ、再び出る様になつた。

出石河岸には次の様な問屋があつた。

西出石河岸

〃柳屋三木氏、三木おたつという人は偉い人であつた

2. 戸敷氏　柳屋の西側にあつた

3. 赤岡氏　柳屋の東側にあつた

4. 安原氏　河岸に面して一番北側

5. 近藤氏

6. 福田氏

7. 竜野屋

8. 高所屋　那是の社宅（小川の東）の所

9. 北林氏　橋詰の南側

東出石

〃木村六郎　橋の東詰北側の家

2. 木村本家

須賀

〃長井氏

（三）

古老が聞き伝えて居る封建時代の川舟の様子では高瀬舟は御城米の運搬が大きな仕事であつたので、舟頭たちも殿様の威勢を笠にきて、かなり威張つていたが、殿様よりの御城米が高瀬舟で下る時は、川沿いの村々にあらかじめ前触れが出される。すると村々は受持の区域の川の良否を舟頭より聞いて川堀をした。若し浅くて通られぬ時、舟止め、舟頭は赤い旗を振つて村人を集めて川を堀らせる。

川堀のすむまで三日でも四日でも舟頭を村に止めて養なわねばならず、昼夜を分たず舟番をするのも村人の任務とされたのであつた。

高瀬舟が廃止される様になつたのは道路が広くなり

手車、長台（ながだい）（二輪の牛車）が輸送に当る様になつた頃からで、現在六十八才になつた古老が四十才の頃で、二十七～二十八年前頃のようである。

史料 宮栗人名鑑（三）

赤松円裕

（六）稲岡秋平

山崎藩士稲岡秋平は、諱を柳、字は章卿、通称を秋平といひ、樣園また薮北と号す。姓は菅原、氏は稲岡といひ、代々山崎町に住んでいた。大年寄稲岡次郎右エ門の長子にして、寛政十年播原町に生れた。青年の頃学に志し、初め赤穂の大江氏を師として漢籍を学び後、京都の竹中氏に師事して医術を学び、文政七年業成り山崎へ帰り、始めて士籍に列し医員に充てらる。時に年二十七、けだし特恩という。人と為り謙虚物を待つ寛にして、長者の風があり、常に忠孝をたしなみ風流を好み、歌道を以て名頗る著る。和歌は「青藍集」に百七首と「銀玉集」三編に八首が収載されている。近世山崎歌壇の隆盛をもたらした先輩として、歌道三巻の第一に挙げられる。晩年播州国に関する古今の和歌を集め「厳潮集」と名づけて出版せんとして果さなかつた。また秋平の歌稿を「樣園詠草」という。万延元年（西暦一八六〇年）八月二十七日六十三才で歿し仙蔵院安誉樣園居士と謚した。山崎町上寺大雲寺境内に林田儒員、越辰（註、河野鉄兜の別名）がしたためた長文の墓碑が建つている。

（七）木村公棟

木村公棟は、通称を但馬屋理平又は理右エ門といつた。但馬屋は山崎町の旧家で代々町役人をつとめた家柄で、公棟は但馬屋五代の当主である。佐用郡乃井野藩士松戸氏の女を娶り、三人の子女を儲け、長男理八に家督を譲り、能筆にして和歌のたしなみが深く、又崇仏心が厚かつた。過年山崎町門前の安井寅一翁が元県社山崎町八幡神社宝蔵の古文書調査の際、発見された公棟奉納の短冊帖和歌五十首によつて明らかになつた山崎歌人で、詳しくは安井氏の原稿「歌人木村公棟」が、「志佐波」第二号に掲載してある。また島田清先生の踏査によつて紹介された「木村公棟建立の一字一石経塔」は、山崎町上寺の共同墓地入口の南側にある高さ二尺八寸、巾一尺三寸、上部を鈍の角塔形とした石塔の正面に「斬字妙法蓮華経」、右側面に「願力擁越平等利益」、左側面に「明和八辛卯年秋八月」を中央にして、「化主現興国瑞独鼎」と「施主木村理右エ門」を右と左に割書し、背面に

公棟上

蓮石写ニ一字ニ以蔵ニ千宝塔ニ者也

いつの世の契りなればか逢がたき
みのりの花の色に染むらむ

と、したためてある。塔は二重台石上に立ち、西方に向つて安置されている。

公様は、明和九年三月十二日歿し、普応軒得道時中居士と諡した。山崎町上寺興国寺に墓がある。

牛市之事

安馬義郎

現在一宮の正門前に於て、春に秋にと賑つている牛市の起源は、かなり古いものと聞いていたが、たまたま百四十年程前の古文書に出あつたので、こゝに紹介致します。

一、於当一宮毎年三月中五穀成就牛馬安全之御祈祷仕奉リニ御座候然ル処当年ゟ御境内ニテ牛馬売買之市相始メ諸運上銀在之御修復之助成ニ致度相談一決致候左候得者当年ゟ三月、八月両度宛御祈祷相勤右御祈祷中牛馬売買為致度候ニ付諸事取究左之通

一、御祈祷中御境内ハ不及申氏子村々ゟ茂博奕賭之諸勝負為致間鋪候事

一、火用心第一ニ候御他領ゟ入込候付村々ニ〇乞と夜分八番人付置諸事大切ニ可致事

一、境内江所々ゟ入込候牛壱疋ニ付ゐ〇代銀五分ツヽ可取之買請候ものゟも右同断五分宛社納可仕為候事

一、牛馬売買之儀向屋江相断売買可仕候商ひいたし候ハヽ壱疋ニ付銀弐分宛能銀なして向屋方江可請取之事

右商ひ中四ヶ村内ニテ狼売買仕セ向敷其段村役人ゟ前日ニ可相達し置候事

一、牛小屋入用又者天王寺運上銀等之儀者右能銀壱疋ニ付弐分宛之銀子ニ以向屋方ゟ致出銀四箇村入用相応不申狼可仕候事

一、右四箇村博魯中見伴相〇いゝし候節向屋差図ニ随ひ致世話可申事

一、御祈祷中御宮鋪地ゟ内諸商人并手づま物〇〇〇見世物等何ゟ与ら須定之通運上銀社納可為致御事運上銀之儀者〇所江元方〇候事

一、手つま物ま祢等氏子之ものゝり共〇銭入為込申間鋪

男子専門
黒阪洋服店
神姫バス前
電二四〇番

候共〇急度申付〇〇〇万一不法之族有之ハ早速村役人中ゟ差押へ可申候事

一、御宮於境内ニ喧嘩口論〇仕向敷候、尤不法族申募リ相及出入入用等多分相掛リ候まゝ右社納ヲ以仕拂可仕候若又社納銀まて引足不申節ハ無拠四ヶ村刻々ニ入可申候社納銀之内諸普請銀并雜用引残所銀有之候節ハ刑足銀何程ニテ茂四ヶ村入用江差出可申事

一、牛馬飼料藁草小糖等ニ致迄我侭ニ売付申向鋪候社内〇〇ハ待込可請差候〇事

一、御祈祷中諸色代銀取扱之儀切手ニて取引可仕候尤他所ゟ持参之金銀等ハ引替所ニテ両替仕罷〇候節者早速引替少し茂差支無之〇可仕候事

一、右諸運上社納銀以御普請〇〇御宮入用筋〇〇会所へ出銀可致候事

一、牛馬御祈祷之御札ハ四ヶ村役人専所々受取夫々配札可致候事

一、牛市之儀ニ付御出役様御〇ひ以定之外臨時之入用四ヶ村役人中立会一村限壱枚宛金銀出入通仕置押切致印形所持可致候事尤右市三ヶ年限其内ニ格別之助力ニ茂相成候ハヽ追々取続きいゝし可申候江共連印為取替一札　如件

文政四年己巳年三月

青果
食料品
八百福商店
本町通　電話四一三
社務　大井越後守
安黒長門
以外庄屋連署

岸田屋所蔵の幕末記録

安井寅一

岸田屋は現在東和通り呉服店岸本徳一氏の宅で此古文書は、縦四十センチ、横三十センチの仙香紙に達筆の御家流で書かれたる其中を抜萃したものである。

『富士野町大火事』文政五午年十一月二十五日夜九ッ時より富士野町出火にて、東側は西村玄道殿家にて止り、西側は飴屋治右エ門殿家にて止り、北は両側共不残類焼に御座候其頃当家は藁屋根にて誠に恐しく事故

家普請思附文政七申二月より相掛り同年四月中旬揃上げ大工は富士野町紅屋吉兵ヱ瓦師は上寺忠左ヱ門下手向は山田村より参り申候

『陣貝上納帯刀御免』　嘉永四亥六月

一銀八貫六拾七匁

一陣貝一羽　桐之箱入并に網袋壱つ

右は御調達銀并に陣貝網袋共取前永納仕り罷在ル処、則御会所に御召出に相成御達書左の通り御下け相成申候事

岸田屋　徳兵衛江

其方儀是迄追々御調達銀元利永納仕度候段全家業出精故の儀、猶又所持の螺貝并に網袋共取前献納御武器の内江は差加に相成、奇特の事に思召依て以来筋目并他所帯刀苗字御免被成下候此段申達候、亥六月十三日

『黒船渡来ニ付献金』　嘉永七甲寅二月五日

一金四両也

右は異国舟江戸浦川に渡来に付て、御上様存外御物入と恐察候故、乍恐聊献納奉仕度奉存候段御伺奉申上候所、御聞届け相成右金子二月八日五つ時町分総代友沢治兵ヱ御殿江致持参申候事

『出水町社倉の由来』

近年米穀高値に相成候に就ては、町内難渋も多く、此後万一凶年飢饉等の節は、必死極難の者も出来可申右に就ては、町内為筋の儀を残し置度存念に有之ル処、不図社倉の儀思い付当嘉永五子年町組頭江社者存念申談し候処、一同大悦いたし何卒社倉取立呉て、後年如何程凶年飢饉に相成候共、町内餓死の者も無之至極深切の存附故可然執計くれ候様被申、依て身元相応に米麥差出レ社倉へ取立申候則三石二斗七升相集り候、貸附返済の儀は、時の直段高下に不拘元米に一割増の約定にて一ケ年に両度貸附申候、然る所右米麥置場所無之魚屋甚右ヱ門古蔵をかりうけ当時入置申候、其后年々積穀相増候に付、土蔵普請の義組頭一統江話し、安政二卯年二月土蔵普請に取かゝり申候、則大工は硯屋九右ヱ門、饅頭屋庄平、普請中人は町内惣かゝりにて同年五月中に普請成就いたし申候

社倉間数　桁行三間半　梁行　弐間　瓦葺

瓦師は　高所村　平左ヱ門

左官は　富士野町　林右ヱ門

（つゞく）

本会見学旅行記

福井政男

五月二十四日（日曜日）曇後晴

易に曰く「地雷復」と「地を掘りて宝を求むるが如し」と。

曽ってはせの人から珍重せられ、もてはやされ、信仰の中心として、文学のセンターとして、時としては政治の中心にまでもてはやされた神社仏閣も国宝という名を頂戴しながら世の多くの人からは忘られようとさえしている古社寺を訪ねて日本美の再発見をしようとの希望をもつもの、折角のことだからついて行って見ようと軽い気分で行く人もあり、老人、壮年、少女中に御夫婦で御同行の方もある。これら埋れた宝を掘り出そうと集った者実に六十八名、この日天気曇れども後晴れて旅行には絶好の天候、午前七時七十人乗り大型バスのエンジンの響きも快調、神姫バス前を出発した。

途中、自己紹介をしながら安富町、夢前町（前注）福崎を経て北条に到着した。こゝで先づお参りしたのが住吉神社。このお宮は由緒あるお宮で播磨四の宮で国司が播磨に赴任すると、先づ神戸（一の宮）にお告げして次々と宮をまわり第四回目にこの宮に御奉告した由。社前に小さい築山があってこの上で鶏合が行われ神事として現在も続けられている。昔の神仏混淆時代の面影を止めて、すぐ隣している酒見寺に足を運ぶ。この寺の鐘楼は大変古い二階造りで鐘もずっと古く、寺の前の方にそびえる多宝塔のとても美しい姿は誠に見事である。北条小学校の裏あたりに五百羅漢があり、小学校五年生位の子供と等身大の石に種々な顔が刻んである。細工は極めて粗雑だが、よく見るとこの五百の顔が誰かに似ている。島田先生が親や知るべのない人がこゝに来てこの石像を見ていると、その中に自分の慕っている人の顔に似ているのがあって、なつかしんで涙しさを慰めるよすがにしたものだと説明。こゝには手洗の石があり、これは石棺の掘り出されたものという。この一事で北条附近には古墳古墳の多いことが察せられる。それから加西町へゆく。

焼上最
ソフトクリーム
味自慢乃
神山菓子店
中央通高店街
電話 二一六番

車窓から見える低い山テーブルランドのこちら広々と開ける田園の中に所々松のこんもり茂つたところがある。すべて古墳である。先づその代表的なもので兵庫県下で最も有名な典型的古墳として重要（文化財）に指定されている古墳を王丘古墳という。昔は王の様な石が敷きつめてあつたが、明治のはじめ心なき人のために掘られて大変荒れ、今は樹木うつそうと繁り御着の古墳と全じようになつている。前方後円のこの古墳のまわりは、水が溜り池をなし蓮の若葉が浮びかわいゝ小魚が泳いでいた。通路も冬は通れるが今は水が深く古墳に渡ることも出来ない。この王丘から名をとつてこの附近の地名が生れたという。ありし昔を偲びつゝ車は一路滝野へと立派な舗装道路を走り　県下八景の斗竜瀧についたのは昼前であつた。曇つた空はからりと晴れて一行は橋を渡つて岩に上り岩を走り嬉々として小児の様に戯れた。小憩の後、車は南へしばらく走り、やがて社町の佐保神社に到着、この宮は唐様に和様を加えたとても手のこんだ彫刻等をうまくちりばめたお宮で、特にその楼門は仲々立派なもの。その彫刻の念入りさは一寸他にその類を見ない見事なものである。車は一路小野町浄土寺へとまつしぐらに走る。浄土寺の手前あたり、無暗に高いアンテナが百本余り林立しているのが目立つた。

家庭電化センター
友沢デンキ
山崎町福原町　電10番

やがて姫路のお城の様に外装を被つた建物の前に車が止つた。浄土寺である。大きな車庫に通してもらい庭を眺めつゝ昼食に舌鼓をうつた。老人夫婦で同行された方が互に語りつゝ食事されている姿が何となくこうした寺にふさわしいように見うけられた。裏庭表庭広い庭がとても美しう掃除されていて塵一つもない。昼食後一服して経堂や南山堂を拝観した。南山上人の御像を拝観したがこの上人の御願は私らの方へぢいっと迫つて来る様な迫力に打たれた。目下二千七百万円をかけて修理中の大仏殿は外囲いを施しているが私らは特に島田先生のお計いで見学した。一枚一枚吟味された瓦、瓦つなぎの太い銅線、巴に刻まれた念仏、やがて一丈八尺の大仏さんが拝まれるようになつたら、朱の外廊と呼応し正に播州の古刹名所として古の面目を更に新たにすることだろう。

寺を辞して国際無線会社へ寄る。世界の各地の局と

常に電波の交換をしている。前述のアンテナはこの会社であつた。軍事上より主として商業上の取引に多く使用されているそうである。やがて一行はこゝを辞して下里の地へ走つた。「夏草や兵共の夢のあと」その昔兵隊さんが走り廻つたであろう青野ヶ原を横切り療養所に見える人たちの全快を祈りつゝ法華山一乗寺の麓についた。かなり登つてお寺についた。宝物殿で国宝を拝観、本堂にゆく。この向に聳える三重の塔、その落ちついた姿華やかでしかも壮厳、山の緑にくつきり浄き出た姿はえも言えぬ景色であつた。法華山一乗寺の御詠歌を口ずさみつゝ寺を辞したのはもう大分おそかつた。

姫路で、島田先生、小林先生と別れて一路山崎へ帰る。車中で、来年は淡路へ行きたいなどの説が出ていた。ほんとうに、よい一日の行程であつた。

郷土史料解説（四）

安井俊二

風土記の宍粟郡

宍粟郡の最も古い文献は、播磨風土記である。播磨風土記も完本でなく、明石と赤穂の二郡は欠けている。

古風土記の完本は出雲だけで、あと常陸、肥前、豊後播磨の五つが世に知られている。いかに貴重な文化財であるかゞこれを見てもわかる。この内の宍粟郡のところだけでも是非読んで頂きたい。文庫本も出ているから手軽に読める。

和銅六年（七一三年）の詔書によつて撰進された最も古い風土記の一つと思考されている播磨風土記は、千二百四十五年前に播磨国引へ井上通泰氏は、（カツチ 粟浪河内説）によつて撰定病色せられたものである。この本は永らく世に知られず三条西家の奥深く蔵されていたのを、嘉永年間に谷森種松氏が前后六年間も懇請し続けて、やつと見せてもらつたという逸話がある。その後刊本となつたのが明治二十年、敷田年治著「標註播磨風土記」で、昭和六年刊行の井上通泰著「播磨風土記新考」が定評ある研究書として名高い。

風土記の宍粟郡は「宍禾郡」と書かれている、勿論本文は漢字ばかりで、原本が相当な誤字、脱字等

氣易く入れる皆様の食堂
栄寿し
神姫バス前（辻）
電話 四〇八番

のある悪本だそうだから、学者は苦心して読んでいる。

本郡には、比地、高家、柏野、安師（本酒加）、石作（本伊和）、雲箇、三方の七つの里名が出ており、その里名の由来や土地の産物などの説明がある。例えば比治里の冒頭を引用すると、

比地の里（土中の上）比地と名ずけし所以は、難波の長柄豊前の天皇の世、揖保の郡を分けて宍禾の郡と作す時、山部の比治に任して里の長とす。此の人の名に依りて、故比治の里という。――――　これは孝徳天皇（六四五―六五四年）の御代、おそらくは大化二年に揖保郡から宍粟郡を分けて一郡となし、山部比地を里長に任命したので、比岩の里という名前ができたとの説明である。

故井上博士の新考は、詳細であるが、播广一円にわたっているし、本郡のことも必ずしも同調出来る説ばかりではないので、地名その他の考証は、地元である本郡の篤志家によつて、千四百五十年の昔に還元した本郡の姿を明瞭にして頂きたいものである。

何といっても、その土地に住みついて親しんでいる土地のことであるから、文献と地図を便りにする学者の説を参考として、実地に当る意味は、地元にあると思う。

次に里名のうちに出ている地名等を掲げて、参考にする。

比地――宇波良村、比良美村、川音村、庭音村、尊谷、稲春谷、

高家――都太川、塩村、

柏野――伊奈加川、土間村、敷草村、飯戸阜

石作――阿和賀山、伊加麻川

雲箇――夜加村

御方――大内川、伊和村

安師――安師川

資生堂、コーセー、マックス、ファクター　特約販売
株式会社　アボシヤ
東和通
TEL 一一四

会報

◎五月二十三日午后八時より山崎町教委会階上において、島田清先生を迎えて座談会を開催、有益な話をあれこれと伺った。

◎五月二十四日午前七時山崎発の観光バスで、本文記事見学記の通り、北条、加西、滝野、社、小野、一乗寺を廻遊。参加者七十人。島田先生の解説で充分満足して頂き成功でした。

消息

山崎藩の武家屋敷について　山崎高校地理歴史班は「歴史地理研究」第六号を特集として前記の冊子を発行。三十二頁、写真版九枚、図面約三十枚特に家中屋敷全図の大図面と、殿様墓古墳出土品図面は珍しい。孔版ではあるが出来がよい。

昔噺（祖母の語った）　堀口春夫氏は祖母より聞いていた幕府時代の物語等を刻明にノートされて相当な量に達したので、何等かの方法で発表してはと知人間で勧めている。藩主の生活から世相人情、平山騒動、長州征伐等、話題豊富で興味深々たるものあり。

会員名簿（四）

（城下）松井　与市　（西町）横尾　昇
（竹前）奥田福治郎　（竹前）西川　芳夫
（竹前）和田　熊治　（山田町）友沢　恭子
（高校）中谷　康郎　（上寺）高瀬ことめ
（中校）田中　武　（東鹿）金尾　孫治

後記

発刊が大変遅延して申訳ありません。次回は九月発刊の予定です。折角御投稿下さった下村、赤松、杉山その他の諸氏分は次号掲載いたします。御寄稿は四百字詰原稿用紙三枚程度の原稿に願いたく、長篇は二、三回に分載して下さい。会報の増頁もいずれ実現する時期があると思いますから御辛抱下さい。

◎会報五号原稿締切　八月十日厳守

書籍・雑誌・事務用品
とくさ文堂
山田町総道神社前
電話　六七番